第77回

アジア・アフリカにおけるヒトとタケ

2015年1月24日（於：京都大学楽友会館）

木本性タケ類は、熱帯から亜熱帯にかけての広葉樹林帯に分布しており、特にアジアには多くの種が生育している。アジアにおけるタケとヒトとの関わりは古く、建材や工芸品、ワナ、紙の材料などとされたり、焼畑耕作地として好んで火入れされてきた。さらに、タケの若芽であるタケノコは、様々な方法で調理され食される。一方、アフリカのタケの種は多様ではないが、広い地域に分布しており、建材や酒の材料、焼畑耕作地とされるなど、地域住民による利用がみられる。

まず、岩松文代氏（北九州市立大学）が、「モウソウチク林を栽培した時代から繁殖する現在にみる日本人のタケ利用」と題し、北九州市合馬におけるモウソウチクの栽培と繁殖の歴史に注目し、現代のモウソウチク林がおかれた局面と日本人のタケ利用の特徴を報告した。モウソウチクはハチクやマダケと並ぶ三大有用竹の一つで、まずは中国から九州に伝播し、そこから日本各地に広まったとされている。元々、福岡では竹材としてマダケの栽培が盛んであったが、1965年に一斉開花枯死を迎えたことで栽培面積が激減した。一方、モウソウチクは、約100年前にタケノコ缶詰の製造が始まったことによって、タケノコの収穫を目的とした栽培が盛んになり、栽培面積が急速に拡大した。しかし、1990年代以降、タケノコ生産･加工への需要が激減し､モウソウチク林の多くは自給用にわずかに利用されるのみとなった。放置されたモウソウチクは雑木林に侵入して分布域を拡大し、山の荒廃を引き起こしている。このように、モウソウチクはヒトの選択によって導入され分布域を拡大してきたが、利用方法が変化した現在ではモウソウチクの拡大はヒトにとって不利益なものとなっていることを報告した。そして、その一因としてモウソウチクは一斉開花枯死の見通しがついておらず、日本人がモウソウチクのような周期の長い一斉開花枯死の習性をもつ種に対応できていないことが挙げられると指摘した。

広田勲氏（名古屋大学）は、「ラオス北部におけるタケの焼畑と竹利用」と題し、焼畑農業におけるタケの役割、食糧や製品としてのタケ、歴史的観点からみた焼畑農業とタケの関係性に注目し、ラオス北部における人びととタケの多様な関わり方について報告した。ラオス北部では、昔から焼畑耕作が営まれている。この地域は照葉樹林帯に属し、休閑林は主に萌芽更新によって再生する。なかでもタケは再生力が強く、複数の野生種・栽培種が生育しており、一年中利用が可能である。人びとは用途ごとに適したタケを選択し、日用生活品やワナ、漁具などに加工している。このようにして作られたタケ製品は、貧しい人びとの収入源ともなっている。また、タケノコは年間を通して食材とされており、様々な副食へと調理される他、漬物や酢に加工される。また、タケの中に棲むタケツトガや竹鼻象虫の幼虫や、タケの根をしがむタケネズミは、人びとの食糧となっている。さらに、アジアにおけるタケの分布域と

焼畑地域には重なりがみられ、これは焼畑によるタケの増加という生態学的な影響とタケの分布域で好んで焼畑が行われるという人為的な影響の双方によると考察した。

伊谷樹一氏（京都大学）は、「タンザニアにおけるタケの分布と利用」と題し、ウランジと呼ばれるタケ酒作りと利用を中心に、タンザニアにおけるタケの利用と分布を紹介した。タンザニアに自生する木本性タケ類としては、Oxytenanthera abyssinica、Arundinaria alpina、Oreobambos buchwaldii、Hickelia africana の 4 種が知られている。また、インド洋沿岸から大地溝帯には、上記 4 種とは明らかに異なるタケが数種自生し、それぞれの群落を形成している。これらのタケの分布域は大地溝帯沿いに集中している。大地溝帯に沿って連なる山脈に、インド洋から吹き付ける湿った季節風がぶつかって上昇気流となり、山地一帯に多くの雨を降らせることで、周囲にタケの生育に適した湿潤な環境が作り出されることによる。とくに、タンザニアでは、O. abyssinica が広域でみられ、建材や燃料として利用されるだけでなく、酒の材料ともなる。この酒は、スワヒリ語でウランジと呼ばれている。ウランジは、タケノコの先端を切除し、その切り口からしみ出た糖液が自然に発酵したものである。タンザニア南部のイリンガ州を中心にウランジ採集を目的として O. abyssinica が盛んに栽培されており、人びとの重要な現金収入源となっていることを述べた。

原子壮太氏（京都大学）は「タケの一斉開花枯死と地域社会－タンザニアの事例から」と題し、タンザニア・ルブマ州イリンガ村におけるタケの一斉開花枯死や集村化政策による村落の誕生、人びとの生業形態、経済自由化、貧困削減政策が、タケの群落形成とどのように関係しているのかを明らかにした。イリンガ村の居住区周辺には、なだらかな丘陵が広がり、その谷間には湿地が点在する。丘陵には方名でムココロンビと呼ばれる野生のタケの群落が、その外縁には森林地帯が広がる。人びとは、湿地で換金用の水稲を、竹林と森林では焼畑耕作により自給用の陸稲を栽培している。1970 年代の集村化政策によって現在の居住区が設定され、その周囲は焼畑用地として開墾された。1970 年代初頭に一斉開花して稚樹バンクを形成していたムココロンビの群落が焼畑の火入れ後に急速に広がった。すると、人びとはムココロンビ林となった土地を放棄し、その外縁の森林地帯へと焼畑耕作地を拡大していった。しかし、1980 年代の経済自由化以降、徐々に人びとの暮らしに市場経済が浸透していった。そして、2000 年には道路の補修工事が始まり、コメの買い付け業者が村を訪れるようになったことで、換金作物である水稲栽培が盛んになっていった。すると、人びとは湿地で水稲を栽培しつつ、耕作に不適な土地として放置してきたムココロンビ林でも焼畑で陸稲を栽培するようになった。しかし、水稲と同価格で販売が可能な陸稲の出現と竹林での焼畑の困難さから、再びムココロンビ林が放置されるようになった。このまま放置されるかに思えたムココロンビ林であるが、2008 年にムココロンビが一斉開花枯死したことによって、再び、利用され始めている。このように、タケとヒトの関わりは相補的なもので、タケは人びとの生活を支える物質であるとともに、人びとの働きかけによって群落を拡大していることを解明した。そして、このようなタケとヒトの関係性は時代ごとに濃淡があるが、地域社会はそれを知識として継承していると結論づけた。

総合討論では、柴田昌三氏（京都大学）がコメントした。まず、アジアとアフリカおいて、タケは一斉開花枯死に合わせて利用されていることを解説した。しかし、その一方で、日本のモウソウチクのように一斉開花枯死までの期間が 100 年以上のものに対しては地震と同じように住民が一斉開花枯死を迎

えたときのタケに対する関わり方を忘れているのではないかと指摘した。また、数十種類のタケを栽培する地域もあれば、一種類しか栽培しない地域もあることに注目し、タケの多様度が異なる原因として、タケは多目的に利用され、最適な種ではなくてもある程度は代用が効くため、積極的に多様な種を栽培する必要がなかったことを挙げた。さらに、そのうえで、タケは多様化を意図して栽培されているわけではないとした。しかし、その一方で、酒作りという特殊な用途をもつ O. abyssinica の栽培個体は野生個体とは遺伝的に異なる可能性があり、ヒトによる選抜の影響があると指摘した。

砂野唯（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／農学研究科）